

報告

学内プログラム融合型のオンライン留学の効果検証 ——BEVI による課題の可視化を経たグローバル教育の実践——

清藤隆春・橋本智
徳島大学高等教育研究センター

要約：徳島大学高等教育センターは、グローバル人材育成を目的とし、毎年夏休みに海外へ学生たちを派遣しているが、コロナ禍のため、2020年度の夏休みはアメリカの南イリノイ大学と連携して、4週間のオンライン留学プログラムを実施した。BEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory) でこの効果測定を行ったところ、グローバル人材の資質の中の「自身の文化や異文化に対する理解」の項目で、改善すべき課題が明らかとなった。そこで、2021年度夏休みには、前年度の課題を踏まえ、異文化理解講座などの学内プログラムを融合させて、オンライン留学を実施した。その結果、全体的に BEVI の数値で改善が見られ、特に参加時に BEVI 得点の低かった学生において一定の効果があることが明らかとなった。

(キーワード：グローバル人材, オンライン留学, BEVI)

Verification of the Effectiveness of Online Study Abroad Program Integrating On-Campus Programs ——A Practice Report of Global Education through the Visualization of Issues by BEVI——

KIYOFUJI Ryushun, HASHIMOTO Satoshi
Research Center for Higher Education, Tokushima University

Abstract: Research Center for Higher Education in Tokushima University has sent the students overseas every summer vacation to develop global human resources. However, due to Covid-19, in the summer vacation in 2020, the Center provided the students with the online study abroad program in collaboration with Southern Illinois University in the United States for four weeks. When the effect was measured by BEVI, the issues to be improved were clarified with respect to "understanding of own culture and different cultures" in the desirable qualities of global human resources. Therefore, during the 2021 summer vacation, based on the issues of the previous year, the Center conducted the online study abroad program by integrating the on-campus programs, such as the cross-cultural understanding course. As a result, the overall BEVI value was improved and there was a certain effect especially in the students with low BEVI scores.

(Keywords: global resource, online study abroad program, BEVI)

1. はじめに

2020年春頃から世界的に急激に拡大し、人々からモビリティを奪い去った未曾有のコロナ禍であるが、国境を超えたオンラインミーティングなどの急速な発展によりグローバル化に拍車がかかっている。日本の高等教育機関では、グローバル社会で活躍できる学生、いわゆるグローバル人材の育成がコロナ禍以前から求められており、多くの大学では、グローバル人材育成を目的に、異文化理解や海外留学プログラムを積極的に取り入れている。留学といえば長期留学が主流であったものの、夏休みや春休みを利用して行う短期留学プログラムの開発が進み、その参加者数が大幅に増

えてきている¹⁾。徳島大学高等教育研究センターでは、毎年夏休みと春休みの長期休暇を利用して、全学部学科の学生を対象に1ヶ月以内の短期海外留学プログラムを企画し、海外の大学・教育機関へ学生たちを派遣しており、コロナ禍後には再開する予定である。

大学が行う学生の海外留学の目的の1つは、グローバル人材育成である。グローバル人材は、〈要素I〉「語学力・コミュニケーション能力」、〈要素II〉「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、〈要素III〉「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」を兼ね備えた人物であると定義づけられている²⁾。

短期留学プログラムでは上記〈要素I〉の語学力は測定可能であるものの、〈要素II〉や〈要素III〉の語学力以外の面である異文化理解や日本人としてのアイデンティティの変化については、測定が非常に難しく³⁾、各大学等では留学の事後アンケート等の主観的評価や満足度調査が主にその効果測定に行われている⁴⁾。その中、近年、情動的・心理的变化を客観的に評価する BEVI^{注1)}(The Beliefs, Events, and Values Inventory)を、海外留学の効果測定のために使用する大学が増えてきている⁵⁾。

新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、2020 年度の夏休みや春休みにおけるオンライン留学^{注2)}が導入され、本学も海外の複数の大学と共同で夏休みにオンライン留学を実施した^{注3)}。BEVIでこの効果測定を行ったところ、著者らがグローバル人材の資質の中でも特に関心を寄せる〈要素III〉の自身の文化や異文化に対する理解に関する項目で、改善すべき課題が明らかとなった^{注4)}。そこで、2021 年度夏休みには、その課題を踏まえ、アメリカ南イリノイ大学(以下、SIU)のオンライン留学に、異文化理解講座などの学内プログラムを融合させて、プログラムの改善を図った。今後、コロナが収束して実際の海外留学が本格的に再開した後もオンライン留学を継続することを踏まえると、その効果の検証は重要であると考えられる。

そこで、本稿では、2020 年度と 2021 年度の SIU オンライン留学参加者の BEVI の結果の比較を通じて、今回の学内融合型の改良プログラムの効果について、グローバル人材育成における検証を行った。

2. 理論的枠組み

文化を表層文化と深層文化の2つに分ける二層構造説がある⁷⁾。表層文化とは、挨拶の仕方、ジェスチャー、服装、料理など、文化の表層部分に位置していて、外部の観察者が容易に捉えることができるものをさす。一方、深層文化とは、外部の観察者が、相手の文化に入っても容易に把握できない、価値観や思考法などを含む、精神的、倫理的、心理的、道徳的な文化の側面などを

さす。なお、単純にお辞儀などの目に見える様子のみを見れば表層文化であるが、その行動の背景の理由については深層文化に含まれる。このような文化構造の理解に使われるのが「冰山モデル」である。このモデルでは、海に浮かんでいる氷山のうち、海面から出ている部分が表層文化であり、海面の下に隠れている部分が深層文化となる。実際の氷山同様、隠れていて目に見えない深層文化の方が圧倒的に大きい⁷⁾。

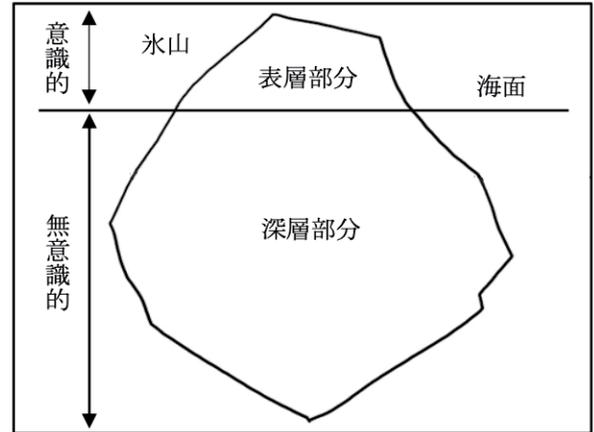


図1 文化の「冰山モデル」(著者作成)

3. 本研究の概要

3.1 前回(2020年度)のオンライン留学の概要

2020 年度夏休みの長期休暇を利用して、徳島大学高等教育研究センターは、SIU と共同で 2020 年 8 月 17 日から 9 月 11 日までの 4 週間、オンライン留学プログラムを実施した。毎週月曜日から金曜日まで毎日、日本時間午後 8 時から午前 0 時まで(アメリカ現地時間午前 6 時から午前 10 時まで)の 4 時間、オンラインで英語授業と異文化交流講義を提供した。クラスは、TOEIC のスコア、もしくは事前英語面接の結果をもとに、4 つにレベル分けされた。各クラス、学生の人数は 15 人程度で、基本的に日本人学生と海外学生が同数になるようにデザインされていた。海外学生の出身で多いのは、コロンビアやサウジアラビアであった。

3.2 今回(2021年度)のオンライン留学の概要

2021 年度 SIU オンライン留学プログラムは、2021 年 8 月 16 日から 9 月 10 日までの 4 週間行わ

れた。徳島大学からは 21 名の学生が参加し、SIU には日本の他の大学へも参加を呼びかけてもらった。毎週月曜日から金曜日まで毎日、オンラインで英語授業と異文化交流講義を提供した。1 日の授業時間については、日本時間午後 9 時から午後 11 時まで（アメリカ現地時間午前 7 時から午前 9 時まで）の 2 時間に減らし、徳島大学の学内プログラムを融合させた。SIU のクラス分けは、前回同様だった。

3.3 2021 年度の学内プログラムの概要

SIU オンライン留学開始前 2021 年 8 月に、異文化理解講座を 1 時間半実施した。そこで、異なる言語や文化を背景とする学生との関わり方や、異文化や自分自身の文化の捉え方等について学ぶ講座を実施した。また、英語を用いたコミュニケーションを行う上でのマインドセットについての講義を 1 時間半したり、実際に徳島大学の留学生と英会話を行う時間も 1 時間半設けた。

さらに、オンライン留学中に毎週 2 回、毎回 30 分間ずつ、徳島大学の英語教員や、英語教員資格をもつ外国人留学生とオンラインで英会話をしたり、ディスカッションを行う少人数の英会話サポート授業も行った。



図 2 英会話サポート授業の様子

4. 研究方法

4.1 調査対象者

本調査の対象者は、2020 年度夏休みの SIU オンライン留学に参加した本学学生 27 名、および 2021 年度夏休み SIU オンライン留学に参加した本学学生 21 名の、合わせて 48 名であった。

4.2 倫理的配慮

参加者は全員インターナショナルオフィスの担当教員と個別面談をして、詳細説明に同意し、参加した。また、BEVI の受検の前に、画面上の趣旨、個人情報の取り扱い方法に同意し、BEVI を受検した。BEVI の数値結果は、受検者には表示されずに、管理者のアカウントにグループ全体の結果が表示され、個人は特定されないようにした。

4.3 調査方法

BEVI は、1990 年初頭にアメリカの臨床心理学者 Craig N. Shealy らにより開発された、オンライン型の心理尺度測定ツールである⁵⁾。信念、価値、そして人生の出来事に関する質問がなされ、その回答をもとに、「誰が、なぜ、どのような状況で、何を学習したのか」を明らかにでき、海外留学や異文化交流体験などでも、効果測定に使用可能である。日本においては、2017 年度に広島大学が BEVI-J として日本語版を開発したことで、広島大学を中心に本学を含めて多くの大学で採用され、日本人学生を含めて数万件のデータが蓄積されている⁵⁾。なお、本学が使用したのもこの日本語版の BEVI である。

BEVI の受検はオンライン上で行われ^{注 5)}、40 項目の個人についての背景質問と 185 のテスト項目の質問で構成され、所要時間は約 30 分である。テスト項目の回答の選択肢は、すべて 4 段階リッカート尺度となっており、受検者は「強く同意する」「同意する」「同意しない」「強く同意しない」から 1 つ選択する。

BEVI の回答結果については、サーバー上で自動的に統計的処理がなされ、管理者はオンライン上で管理者アカウントから分析結果を確認できる。その中の「全体プロフィール」(Aggregate Profile)を見ると、グループ全体のプログラム前の受検結果 (T1) とプログラム後の受検結果 (T2) について、表 1^{注 6)}のように 17 のスケールで測定され、それらのスケールは理論・概念で 7 つ (I~VII) の領域に分けられている。各スコアは 100 点満点で表されており、50 を平均としている。T1 と T2 の変化については、5 点以上出ると有意性があるとされる⁵⁾。

表 1 BEVI のスケールの解説と解釈

I 形成的指標 (Formative Variables)	
スケール 1	人生におけるネガティブな出来事 (Negative Life Events)
II 中核的欲求の充足度 (Fullfillment of Core Needs)	
スケール 2	欲求の抑圧 (Needs Closure)
スケール 3	欲求の充足度 (Needs Fulfillment)
スケール 4	アイデンティティの拡散 (Identity Diffusion)
III 不均衡の許容 (Tolerance of Disequilibrium)	
スケール 5	基本的な開放性 (Basic Openness)
スケール 6	自分に対する確信 (Self Certitude)
IV 批判的思考 (Critical Thinking)	
スケール 7	基本的な決定論 (Basic Determinism)
スケール 8	社会情動的一致 (Socioemotional Convergence)
V 自己とのかかわり (Self Access)	
スケール 9	身体的共鳴 (Physical Resonance)
スケール 10	感情の調整 (Emotional Attunement)
スケール 11	自己認識 (Self Awareness)
スケール 12	意味の探究 (Meaning Quest)
VI 他者とのかかわり (Other Access)	
スケール 13	宗教的伝統主義 (Religious Traditionalism)
スケール 14	ジェンダー的伝統主義 (Gender Traditionalism)
スケール 15	社会文化的オープン性 (Sociocultural Openness)
VII 世界とのかかわり (Global Access)	
スケール 16	生態との共鳴 (Ecological Resonance)
スケール 17	世界との共鳴 (Global Resonance)

また、「一貫性」(Consistency)と「適合性」(Congruency)の項目は、受検結果自体の妥当性を表す指標で、7~8割の点数があることが望ましいとされている⁶⁾。本調査の対象となっているプログラムはいずれも、「一貫性」と「適合性」がすべて8割程度であったため、分析するのに妥当な数値であると言える。

「デシルプロフィール」(Decile Profile)では、参加者の得点群の割合が表示される。具体的には、100点満点のスコアが10段階(1~10)に区切られ、それぞれに何%の参加者が集まっているかを知ることができる。「全体プロフィールの対比」(Aggregate Profile Contrast)の結果を見ると、17スケールごとに、参加者の得点の上位群(Highest)、中位群(Middle)、下位群(Lowest)のスコアの平均も見ることができる。

4.4 分析方法

本稿では紙面の都合上、上記の17のスケールの全てを扱うことはできない。そのため、グローバル人材に必要な要素の中で著者らが特に関心を寄せる(III)「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」に大きく関連する項目である8「社会情動的一致」、11「自己認識」、15「社会文化的オープン性」、17「世界との共鳴」の4つのスケールに絞って分析を行うこととした。

スケール8「社会情動的一致」は、7つの領域のうち「IV 批判的思考」の領域に含まれる。「自己、他者、世界に対してオープンであり、考えている；思慮深い、実用主義、強い意志；自立欲求がある一方で傷つきやすい他者を気遣うなど、世界をオールオアナッシングでとらえない」^{注7)}特質であり、自分だけではなく他者のことをよく理解していて、他人への配慮ができる傾向を示す項目である。グローバル人材の育成においては、自分自身とは異なる文化背景の人への理解と配慮も行う必要がある、グローバル教育を通して、この自分自身の自文化と他文化を深く理解できる学生を育成したい。その点で、この項目は重要なものの1つである。

スケール11「自己認識」は「V 自己とのかかわ

り」の領域に含まれる。「内省的傾向；自己の複雑性を受け入れる；人々の経験，状況の差異を気遣う；難しいまた議論のある思考，感情を許容する」^{注7)} 傾向を示す。課題に直面したとき，ただ単に表面上の文化面などの差にとらわれて判断するのではなく，物事の本質を掴み，課題解決への道筋を探すという，深い複雑な思考がグローバル人材には求められる。課題解決に取り組んでいる自分自身の姿勢や能力を客観的にみる力も必要となる。それで，グローバル人材育成には，この「自己認識」の項目も欠かせないものと言える。

スケール 15「社会文化的オープン性」は「VI 他者とのかかわり」の領域に含まれる。「文化，経済，教育，環境，ジェンダー，国際関係，政治に関する様々な行動，政策また実行について進歩的，オープンである」^{注7)} とされている。グローバル人材には，社会や文化の様々な要素に興味や関心を持ち，その相違に気づける特質は不可避である。

スケール 17「世界との共鳴」は「VII 世界とのかかわり」の領域である。「様々な個人，集団，言語，文化について学習することまた出会うことに傾倒している；世界への関与を模索している」^{注7)} 傾向である。グローバル人材にとって，変化に富んだ集団やその言語に興味を持って，その人たちと関わりあう努力をしているかどうかと言う特質は，最も重要な特質と言える。異文化体験を通して，この特質こそ伸ばしていきたいと考える。

5. 分析結果および考察

本稿では，まず，2020 年度および 2021 年度の SIU オンライン参加者のスケール 8，11，15，17 における「全体プロフィール」(Aggregate Profile) のプログラム開始前（以下，「T1」とする）の結果をもとに，参加者の特質を比較した。次に，「全体プロフィールの対比」(Aggregate Profile Contrast) における上記 4 つのスケールの参加者の得点の上位群(Highest)，中位群(Middle)，下位群(Lowest) のスコアの平均の T1 とプログラム終了時（以下，「T2」とする）の数値の変化をもとに，プログラムの効果を分析し，考察した。最後に，「デシルプロフィール」(Decile Profile) のスケール 8 と 15 の

T1 と T2 の変化分析をもとに，プログラムの効果を考察した。

5.1 4 つの Aggregate Profile

表 2 は，2020 年度と 2021 年度のスケール 8，11，15，17 の Aggregate Profile の T1 の得点結果である。表 2 の通り，両年度の T1 を比較すると，スケール 8「社会情動的一致」では，2020 年度が 58 ポイント，2021 年度が 48 ポイントであり，有意差が見られる。スケール 8「社会情動的一致」は，「自己，他者，より広い世界を認識している/オープンである，思慮深く，実用主義，意思が固い，自立の必要性を認める一方で弱者を気遣うなど世界を白黒では捉えない」傾向を示しているが，2020 年度の方で有意に点数が高いため，2020 年度の参加学生の方が物事をはっきりと区別して捉えないという傾向が見られる。

スケール 11，15，17 では，年度による有意差が見られないため，ほぼ同じ傾向を持った集団が参加していることが分かる。また，これら 3 つのスケールの平均得点が 79 から 88 であることから，このプログラムに参加した学生はグローバル人材の特質をもともと持っている学生であることも分かる^{注8)}。

表 2 4 つのスケールの T1 の結果

	2020 年度	2021 年度
スケール 8	58	48
スケール 11	88	85
スケール 15	83	83
スケール 17	79	76

5.2 スケール 8「社会情動的一致」

図 3 は，スケール 8 の上位群，中位群，下位群の T1 から T2 への得点の推移である。図 3 が示している通り，「自己と他者を理解し，他者への認識が深く，自分の規準にこだわらない」特質は，グローバル人材には欠かせないものである。この

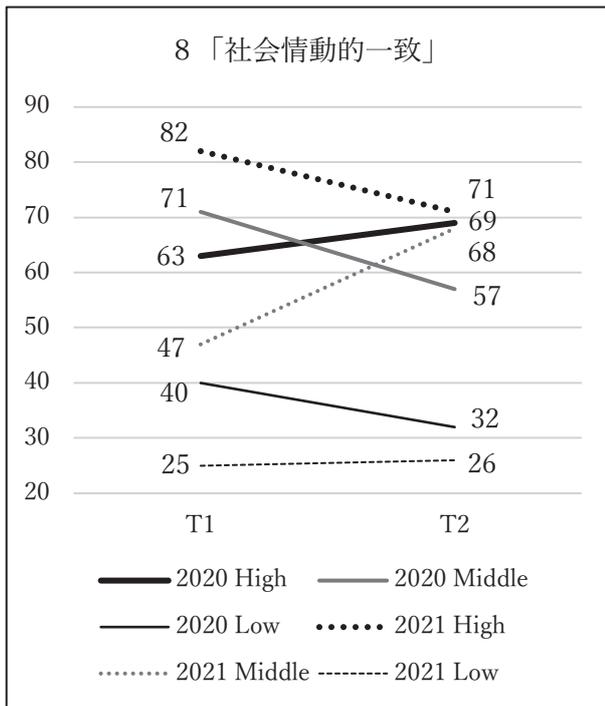


図 3 スケール 8 の T1 と T2 の結果

「世界や社会にオープン」で「物事を白黒で捉えない」傾向の高い学生は、2020 年度で上位群と下位群がプログラム後に得点が低下している。

2020 年度では、オンラインの画面上のコミュニケーション場面において、他国・多文化理解や共感の度合いを深めていくことは非常に難しく、もともと海外や外国人との交流に興味を持った学生にとっては、オンラインプログラムでの効果は高くなく、期待外れだったと思われるかもしれない。あるいは、想像と違いコミュニケーションが複雑で難しかったとも考えられる。

この 2020 年度の反省を踏まえ、事前に日本語による異文化理解の授業をしたり、英語でのディスカッションに参加しやすいように本学教員による英語指導をプログラム中に定期的に取り入れたりした。2021 年度の中位群の学生の得点が上昇したことから、彼らにとってプログラムは効果があり、海外への認識が高まったと考えられる。

下位群の学生は、もともとオープン性の傾向が低いため、有意で上昇の変化が見られなかったが、2020 年度のように得点が低下することはなかった。上位群の学生は、2020 年度、2021 年度ともに得点が低下した。

このように、2021 年度でのプログラムの改善は、世界に目を向け、自己と他者理解において中位群の学生にとっては効果があったが、下位群の学生にはその傾向を伸ばすほどのインパクトはなく、上位群の学生にとっては 2020 年度と同様、学生の期待にこらえられるほどインパクトのある内容とは言えなかったと考えられる。

5.3 スケール 11「自己認識」

図 4 は、スケール 11 の上位群、中位群、下位群の T1 から T2 への得点の推移である。図 4 が示す通り、得点の高い上位群と中位群の学生は、T1 で 90 点ほどもあり、もともとこの傾向が高く、2020 年度及び 2021 年度のプログラムでも有意になるほどの得点の上昇は見られていない。一方、下位群は、2020 年度はプログラム前後で有意に得点が減少、2021 年度でも有意ではないが得点の減少が見られる。

本プログラムは、オンライン上で英語学習と異文化体験を行うものであり、自己認識や複雑な問題に取り組む意欲を高めるような活動は行っていない。本来の海外留学であれば、外国人との英語でのコミュニケーションがうまくいかなかったとき、何が問題であり原因だったのか、自分はどうすれば良かったのか、同じような問題に出会ったときどのように解決していけば良いのかなど、じっくり考える機会が多くある。しかし、オンラインでのプログラムはスクリーン上のコミュニケーションであり、うまくいなくても授業が終われば、即座に通常の自文化に戻ってしまい、内省をする機会があまりない。

このことを踏まえ、2021 年度では、SIU のオンライン授業以外に、本学教員によるサポート授業を行い、英語でのディスカッションの準備などを支援した。それは、単に英語の補講という役割だけでなく、異文化の背景を持つ教員やクラスメートと円滑にコミュニケーションがとれるようにトレーニングする意味合いもあった。2020 年度の下位群の学生の得点が低下したのは、自分が英語のクラスに期待していたように参加できず、自分の

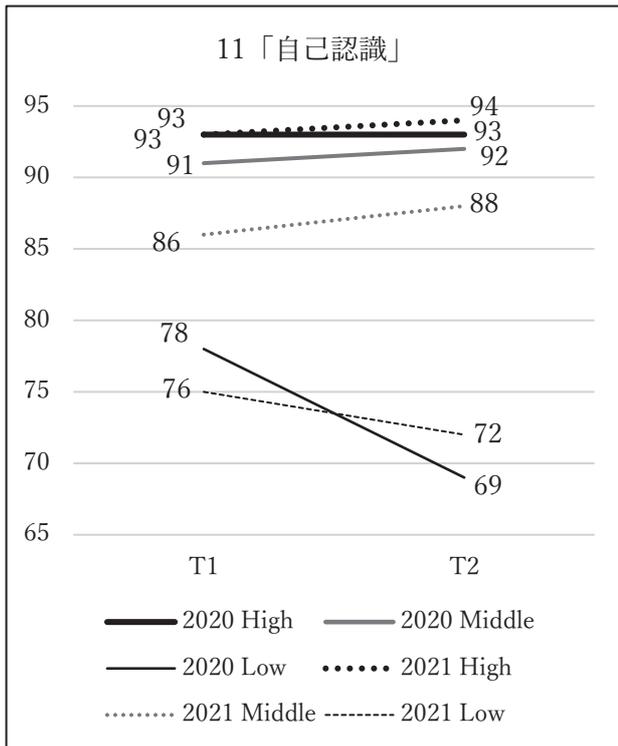


図 4 スケール 11 の T1 と T2 の結果

能力の把握に加え改善方法の模索を避けてしまったことが原因と推測し、2021 年度の本学教員のサポート授業により、ポイントの上昇を期待した。しかし、下位群の学生の得点の減少は緩やかになったものの、上昇させることはできなかった。

プログラム開始時における学生の傾向を見ると、2020 年度、2021 年度ともに、すでに「自己認識」の高い学生グループ（中位群、上位群で 86 ポイント以上）と、「自己認識」が低い学生グループに分かれている。下位群が両年度とも T1 から T2 で得点が低下していることは、海外には関心があるものの、課題解決に取り組むために複雑な思考をしようとはしない、あるいは自己内省をあまりしない傾向にある学生にとっては、オンラインでの英語学習・異文化体験には十分な効果があるとは言えず、むしろそういった機会を避けたいという思考回路へと進む傾向になっていることを示しているのかもしれない。

5.4 スケール 15 「社会文化的オープン性」

図 5 は、スケール 15 の上位群、中位群、下位群の T1 から T2 への得点の推移である。この図 5

は、文化や経済、政治などに興味を持ち、自分と異なるものを理解しようとする傾向の高さを示しているが、2020 年度では上位・下位群でほぼ得点の変化が見られなかったため、2021 年度にはプログラム開始前に異文化理解の授業を行い、自分と異なるものへの関心と理解を高める工夫をした。その結果、T2 で下位群の得点が大きく伸び、中位群も多少の上昇が見られている。一方で、上位群の変化は見られなかった。

休み期間中に単位に関係ない英語プログラムに申し込む学生は、元々異文化に強い関心があると考えられ、その学生をさらに伸ばすことは難しいと考えられる。一方、下位群の得点が伸びていることから、異文化理解の授業は元々そのことにあまり関心のなかった学生には効果的だったと考えられる。

「社会文化的オープン性」の傾向が弱い学生にとって、異文化理解の授業を付け加えたオンライン留学プログラムは効果的だと考えられるので、コロナ禍後も、ハードルが高い海外渡航を伴うプログラムだけではなく、このオンライン留学も継続して実施していきたいと考えている。

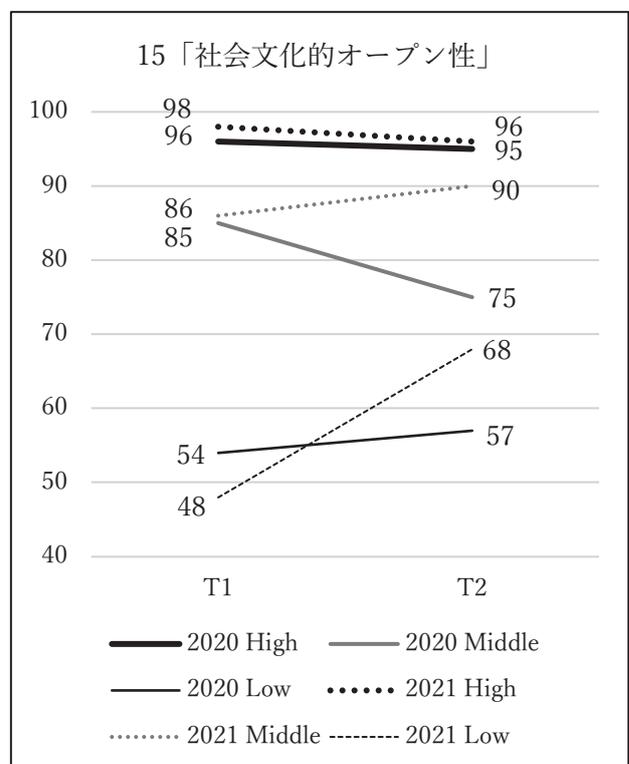


図 5 スケール 15 の T1 と T2 の結果

5.5 スケール 17「世界との共鳴」

図 6 は、スケール 17 の上位群、中位群、下位群の T1 から T2 への得点の推移である。このスケール 17 では、様々な言語や文化に触れ学びたいという意欲を表す度合いを知ることができる。両年度とも、T1 で上位群及び中位群の得点は高く、プログラム前後での得点の有意差はない。もともと英語やアメリカ文化を学びたいと思っている学生が本プログラムに応募しているため、T1 の得点は高い。そして、本プログラムは、この傾向を伸ばすほどのインパクトを与えることはできなかったことが分かる。一方、2020 年の下位群で得点が低下していたことを踏まえて、英語サポートを加えたり異文化理解講座などを導入したところ、2021 年度の下位群のこの特質を大幅に上昇させることができた。

2021 年度のプログラムでは、上位・中位群の得点の上昇は見られなかったが、経済的・時間的な理由で実際の海外留学ができない学生もおり、上位群であっても、オンラインの学習を通して、グローバル人材になるために必要な特質を伸ばすことができるように、プログラムを開発していくべきだと考える。

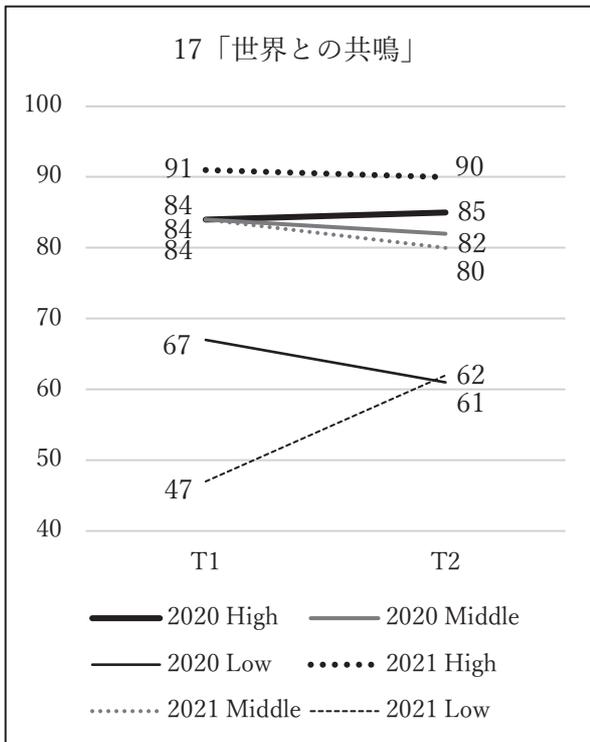


図 6 スケール 17 の T1 と T2 の結果

5.6 スケール 8 と 15 の比較

図 7 は、スケール 8 とスケール 15 の 2021 年度の T1 と T2 の得点割合を比較したものである。

スケール 15 は「冰山モデル」の見える部分、つまり自己で認識できるレベルの特質である^{注8)}。自分は異文化・多文化に興味を持ち、実際に行動を起こしている外向的な人と認識していることを示す。2021 年度のプログラム開始前では、スケール 15 で 71~100 点の学生が全体の 55%、終了時は 67%となっている。つまり、自分は外向的であり進歩的であると意識している学生が本プログラムに応募し、プログラム終了後にその認識は更に上昇したことがわかる。

一方、スケール 8 は、「冰山モデル」の見えない部分である個々の意思や欲求、思考傾向において、物事を白黒で判断したりせず、他者を理解し共感するという特質を示す。この割合分布を見ると、プログラム開始時、終了時ともに、低得点から高得点までの学生の割合は同じ、つまりこの特質の傾向が高い学生と低い学生が混在していたことが分かる。

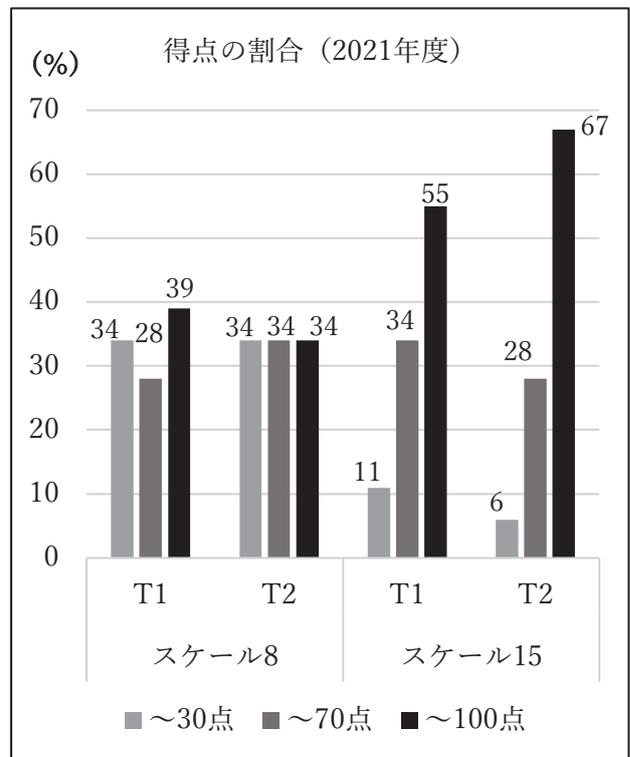


図 7 スケール 8・15 の T1・T2 の得点割合

このことから、自分は外向的な人間だと思っ
ても、保守的な思考を持った学生が多いとい
うことが推測される。これは、オンラインか実際の
海外留学に関わらず、意識されること、意識下
にあるものをどう捉え、必要な特質を伸ばして
いくかに関する中で、心理学的なアプローチも必
要になってくる。オンラインでの学習・体験の検
証だけでなく、BEVI を使って実際の海外留学
でも学生の意識（無意識も含めた）の傾向も探
っていくべきだろう。

6. まとめ及び今後の課題

BEVI を用いて可視化した 2020 年度の SIU 夏
休みオンライン留学の課題を踏まえ、2021 年
度のこのオンライン留学のプログラムには、事
前に本学教員による異文化理解の授業をし
たり、英語でのディスカッションに参加し
やすいように本学教員による英語指導を
プログラム中に定期的に取り入れたりした。
これは、単に英語の補講という役割だけ
でなく、異文化の背景を持つ教員やクラ
スマートと円滑にコミュニケーションが
とれるようにトレーニングする意味合い
もあった。

この学内プログラムを融合した 2021 年
度のオンライン留学は、全体的に、上位群
の学生にとっては 2020 年度と同様、グ
ローバル人材に関する特質を引き上げる
ことはできなかった。一方、世界に目を
向けさせたり、自己と他者理解の面にお
いて、中位群および下位群の学生には
一定の効果があつたと考えられる。特
に、「社会文化的オープン性」の傾向が
弱い学生にとって、異文化理解の授
業を付け加えたオンライン留学プログラ
ムは効果的だと考えられる。従って、
コロナ禍後も、ハードルが高い海外渡
航を伴うプログラムだけではなく、こ
のオンライン留学も継続して実施して
いきたいと考えている。また、上位群
の学生であっても、経済的・時間的な
理由で実際の海外留学ができない学
生もおり、このような学生がオン
ラインでの学習・体験を通して、グ
ローバル人材になるために必要な
特質を伸ばすことができるように、
プログラムを開発していくべきだと
考える。

謝辞

2020 年 5 月、コロナ感染が急速に
拡大し始めた頃、SIU 英語センターの
センター長である William Hellriegel
氏はオンライン留学の共同開発の申し
出に対して快諾し、メールやオンライン
ミーティングでのこちらの度重なる要
望に応じてくれた。William 氏に、心
より感謝申し上げます。

また、今回の内容を BEVI で分析す
る際には、広島大学の西谷元教授に、
オンラインミーティングで何度も分析
の助言をいただいた。西谷教授に、
心より感謝申し上げます。

注

- 1) Beliefs, Events, and Values Inventory (2018).
About the BEVI. Retrieved March 1, 2021, from
<https://thebevi.com>
- 2) オンライン留学については、バーチャルに海
外の学生と繋がって課題解決型のプロ
ジェクト等を行う COIL (Collaborative
Online International Learning) とは区
別されて扱われるのが一般的である。
本稿では、オンライン留学を、「一定期
間オンラインで海外大学と繋がって、
外国語の授業を受けたり、海外大
学生と交流を行う国際プログラム」と
定義する。
- 3) アメリカ南イリノイ大学 (Southern
Illinois University) は本学の海外学
術交流協定校である。プログラムの
共同開発には、英語センターの
CESL (Center for English as a
Second Language) (<https://cesl.siu.edu>) が協
力してくれた。なお、CESL の現
地での英語プログラムには、コ
ロナ禍以前には毎年本学から学
生を複数派遣している。
- 4) 2020 年度夏休み SIU オンライン
留学の概要は清藤・橋本 (2021) の
文献 8) に詳細が説明されている。
- 5) BEVI の日本語版は以下のサイト
からログインして受検できる。
<http://jp.thebevi.com/test-admin/>
- 6) 上記「注釈 5」の「BEVI の日
本語版 (<http://jp.thebevi.com/test-admin/>)」
受検の際に表示される結果「BEVI
のスケールの解説と解

積」の表を元に著者が作成した。

- 7) BEVI の日本語版 (<http://jp.thebevi.com/test-admin/>) の受検結果の「BEVI のスケールの解説と解釈」を原文のまま引用している。
- 8) BEVI 開発者の Craig N. Sheal 氏らとともに日本版 BEVI の開発および運営を行う広島大学の西谷元教授に、2021 年 10 月、オンラインにて BEVI 分析についてご教示いただいたが、これはその時に得た知見である。
- 7) 石井敏ほか (2013) 「異文化コミュニケーションの基礎概念」第 1 章. 石井敏ほか (2013) 『初めて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築へ向けて—』pp.11-36, 有斐閣.
- 8) 清藤隆春・橋本智 (2021) 「BEVI を用いたオンライン留学の効果測定—コロナ禍でのグローバル人材育成の試み—」『徳島大学高等教育研究センター学習支援部門国際教育推進班紀要』pp.12-21, 徳島大学高等教育研究センター学修支援部門国際教育推進班.

参考文献

- 1) 奥山和子 (2017) 「留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス：質的研究手法を使って」『大学教育研究』25, pp.83-101, 神戸大学教育推進機構.
- 2) グローバル人材育成推進会議 (2012) 「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>, (最終アクセス日:2021 年 10 月 30 日) .
- 3) 永井敦 (2018) 「BEVI によるショート・ビレッジ型留学プログラムの効果分析—『グローバル人材』は育成できるのか?—」『広島大学留学生センター紀要』22, pp.38-52, 広島大学留学生センター.
- 4) 大西好宣 (2019) 「短期留学及びその教育効果の研究に関する批判的考察：満足度調査を超えて」『JAILA JOURNAL』5, pp.51-62, JAILA 事務局.
- 5) 西谷元 (2017) 「留学効果の客観的測定・プログラムの質保証—The Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI-j)—」『広島大学高等教育研究開発センター高等教育研究叢書』137, pp.45-70, 広島大学高等教育研究開発センター.
- 6) 東矢光代・當間千夏 (2019) 「世界の捉え方に見る学習者の特性とクラス・ダイナミクス：BEVI の結果に基づく分析」『言語文化研究紀要：Scripsimus』28, pp.23-45, 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系.